

大正七年十二月五日發行

婦人と子ども

第十八卷

第十二號

日本幼稚園協會

婦人と子ども 第十八卷 第十二號 目次

日本幼稚園教育の黎明	ソファヤ・アラベラ・アルウ*ン
律動的遊戯を盛ならしめよ	岸邊 福雄
玉繋ぎの遊び方	土川 五郎
轉地保育の實際	尾崎 トヨ
雜錄	
諸國お伽話	日本幼稚園協會研究部

會費改正

本會第廿三回總會の決議に基き本會々費左の如く改正致候間御承知願上候

一ケ月 金拾五錢

六ケ月 金九拾錢

一ケ年 金壹圓八拾錢

右は雜誌印刷費の騰貴に基き候ものにて十一月分より實施致候。就ては既に御拂込みの方へは追て追加額御報告申上ぐべく候間其の節御手数ながら追加御拂込下され度候

十二月

日本幼稚園協會

日本幼稚園協會書臨時總會

一、十二月十四日(第二土曜日)午後一時半より

一、東京女子高等師範學校講堂に於て

一、順 序

一、會長開會の辭

一、議 事

幼稚園長及幼稚園保姆の待遇につき當局へ建議の件

一、講 演

大戰の開始、經過、終局、

東京文科大學助教授兼
東京女子高等師範學校教授

齊 藤 清 太 郎 君

一、閉 會

十 二 月

日 本 幼 稚 園 協 會

二調

ヲドレ・ヲドレ

1, 3 5	3, 5 1	6, 1 6, 4	3, 5 5	6, 5 4, 3
ヲドレ	ヲドレ	カゼフク	ママニ	キノハモ

6, 5 5	4, 6 5, 4	3, 5 5	5 6 5 4 3 3	5 3 3 0
ヲドレ	コトリモ	ヲドレ	アツチヘイッテ	ヒラヒラ

5 6 5 4 3 3	3 5 5 0	5 6 5 4 3 3	5 5	
コツチヘイッテ	ヒラヒラ	アツチヘイッテ	ヒラヒラ	

婦人と子ども

第十八卷
第十二號

大正七年十二月五日發行

踊れく

踊れく

風吹くまゝに

木の葉も踊れ

小鳥も踊れ

あつちへ行つて

ひらく

こつちへ行つて

ひらく

踊れく

風吹くまゝに

帽子も踊れ

シヨウルも踊れ

あつちへ行つて

くるく

こつちへ行つて

くるく

踊れく

風吹くまゝに

小犬も踊れ

小供も踊れ

あつちへ行つて

はゝ

こつちへ行つて

はゝ

(倉橋生)

日本幼稚園教育の黎明

玉成保母養成所長 ソファヤ・アラベラ・アルウキン

私は今あまり世間といふものへ顔を出したくないと存じて居ります。それで新聞雑誌等の記者がお見えになつても出来るかぎりお話をすることを避けて居ります。私のやうな世間見ずは現在の日本の幼児教育に對して少しでも云々すると忽ち皆さんの御機嫌を損ねて了ひます、自分で言ひたいことは言へませんし、言ひたくないことは尙言へません。それで勢ひ沈黙を守つて居るより他仕方がないことゝなるのであります。

私は日本の保母の方々ともつと接して行き度い希望を持つて居ります。私はまだよく皆さんを理解して居ませんから、皆さんと接して皆さんをもつとよく理解したいと思ひます。さうしたら私のやうな未熟者でも多少學んだ所を以て皆さんの御

事業のお役に立たせていたゞくことも出来はしないかと思ふのであります。

私は今感激に溢れて私の小さい仕事に精を出して居ります。思ひ迫つて涙に明かす夜も間々ある位で御座います。幼きものを立派に育て上げて行くことによつて何うかして日本の國を向上せしめたい——斯う思ひ到る時、私は私の筋肉の非常にひきしまることを覺えます。

日本の保母は今明かに知識の不足を感じつゝあります。幼児を育てる前に、自分自身の教養をもつと眞剣になつて考へなければならぬとお考へになつてゐる方々も多いことゝ存じます。おしなべて自分が不充分であるといふことは今の日本の保母の方々が著しく感じて居られることに違ひ

ないと思ひます。それですから私達はお互ひに助合もし、勵はげみ合ひもしたいと思ひます、しかし今申しましたやうに言ひたいことは言へず、言ひたくないことは尙言へないといふやうな状態として自分が見てゐる日本の幼稚園界を私はかなしいと思はずには居られません。すべてがまだ善くなつては居りません。

日本の多くの母親は我が子の教育に對して非常な熱心と希望とを持つて居ります。私の存じ上げてゐる母親達は大抵毎日お一人やお二人相談においでにならないことはありません、而して我が受ける質問は「此の子を何うしたらいいでしやう」といふことであります。或る母親はその子の身體の弱いことを憂へます、或る母親は其の子の我儘なことを慨なげきます、或る母親はその子の情愛の薄いことを哀しみます。まことに日本の母親はその子の教育に熱心であります、しかし哀しいことに彼等は如何に教育すべきかといふことを知りません。

彼等には精神的の修養が不足して居ります。母親の素養のないために折角幼児の現しかけた美しい芽がわずかの不注意のために害そごはれて行きます。

是等のとが此母親達を通して私にはよく分るのであります。しかし日本の母親の子供に對する愛は實に深いものであります。若い母親がその子を育てる時は夜の目も寝ずに心配致します。是等の若き母親に育児法を教へてやると彼等は一生懸命になつて貧せむるやうにこれを聞きます、而してその通りに行はうとします。この母親の熱心さを保母の一人々々が持つことが出来たならばと私は何時も思ふのであります。日本に斯くの如き熱心な母親がある以上は、目下の幼稚園界が何うあらうとも私は決して勇氣を失ひません。

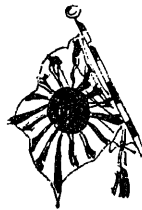
お互ひに何時も溢れるやうな愛を湛へてゐたいと思ひます。全心全力を擧げて幼児の爲めに盡さうではありませんか、我を幼児に與へ盡さうではありませんか。斯くするとき幼児に信じられても

恥かしからぬ保母となり、親は心からなる感謝を保母に捧げるのでありませう。たゞ他人を叩き倒して、いも自分だけは前へ乗り出さうといふやうな同情的氣分の少しもない人間が多くなつて行きさうな日本の現在の状態には心から寒心に堪へません。私は深く考へる人を欲しいと思ひます。己を制し得る人を欲しいと思ひます。粘着力の強い人を欲しいと思ひます、所信を斷行する勇氣の人を欲しいと思ひます、身も心も健全で而かも温い同情心に富んだ人を欲しいと思ひます。

日本の一部の保母は本當に目覺めて來ました、彼等は渴けるものゝ如く知識の泉に口づけて居ります。しかしこれらの保母にとつても哀しいことは彼等に胸襟を展いて誠心から相談相手になつてくれる心の友が不足して居るといふことであります。

要するに熱心な母親と可愛い幼兒と誠心ある幾人かの同志とがある間は保母は縦し如何なる逆境

に居るとも喜んでその仕事を勵んで行くことが出來ませう。本當に清い動機から、子供可愛の情から、日本國を思ふ心から、幼兒のために、献身の努力を惜まない人々が世に知られずに、その勤めを果たして行かれるといふその心の奥の美しさに日本の幼稚園教育の黎明が來てゐることを臆氣ながらに感知することの出來るのは誠に悦ばしいこととであります。(文責在記者)



律動的遊戯を盛ならしめよ

東洋幼稚園長 岸 邊 福 雄

左の一篇は去る十一月十六日麻布幼稚園に開催せられたる甲辰組合會に於て行はれたる岸邊福雄氏の講演の一小部分を筆記せるものにして同氏の校閲を経ざるものなり、尙本記事の見出しは全然記者の一存に出でしものなることを附記して大方の誤解を防がんとす。(記者)

土川先生の律動的遊戯が近頃世間に認められて來まして、各所に於て盛んに研究されて居り、幼兒の遊戯として、この遊戯が採用されて居ることは誠に結構なことゝ存じます。私も大賛成でありまして、自分の幼稚園などでも保姆に残らず勧め、律動的遊戯の講習會に出席させて居ります。

律動的遊戯はこれまで我が國になかつたものでありまして、斯る遊戯を日本の教育界に根づかしためた土川氏の功勞は長く没すべからざるものがあると思ひます。

日本人が律動的訓練に乏しいことは確かにこれまでの教育に斯る遊戯が利用されてゐなかつたことにその一半の責が負はされるであらうと思ひます。斯る遊戯で訓練されなかつた我々の動作は鈍重で間が抜けてノロノロしてゐます。先達も私が小學校長の一行と渡米いたしました時、紐育市を歩いてゐると在留の邦人に『皆さん、どうか足を揃へて歩いていたゞきたい、君達十二人が各自に歩いたのでは、二十四本の足が無茶苦茶に入り亂れて、まるで百足ひかてが歩いてゐるやうで見つともなくつて仕様がな』と注意されて了りました。外國の人は調子といふことを重んじますから他人同志が偶然肩を並べて街を歩くやうな場合でも、ちやんと歩調が合つて居ります。外國の人は律動的

に身體を動かしますから、その動作が實に軽やか

であります。市俄古や紐育の街では自働車や馬車

が間斷なしに、それこそ文字通りに織るやうに往

來してゐて、我々赤毛布には却々往來を横切るこ

とは出来ません。わづかに巡査の御厄介になつて

向ふ側へ行き着くといつた有様でありますが、あ

ちらの人は燕の如く自由に體を代しかはながら平氣で

往來を横切ることが出来ます、これなぞもあちら

の人々が律動的リズムに動いてゐるからであると思ひま

す。リズムといふものは我々の生活の上から言つ

て實用的にも却々重要なものであります。これを

調子といふ程の意味に解釋しても如何に調子が我

我に必要なかは、世の中の大抵のことは調子が

よく行くと誠に具合がいゝのにも見ても分ります。

自分も調子に乗り、他人も調子に乗りして行けば

萬事は大抵、故障なく捗つて行くのであります。

その中で調子外の人があつて無理からに調子に乗

らないといふやうなを言つて威張つて居られる

と誠に具合のわるいものであります。

以上の如く私は律動的訓練の必要といふことを

十分に認めて居るつもりで御座いますから土川氏

の努力には常に感謝いたして居るわけでありま

す。殊に先日保母達が習つてまゐりました林檎を

摘取る遊戯や農夫の遊戯は嘗て私が亞米利加から

持ち歸り譯出して一般にお頒ちした「幼稚園細目」

の十一月の條と考へ合せて實によく計畫されて居

ると思つて大いに愉快を禁じ得ませんでした。

乍併、土川氏の遊戯法が盛んに行はれつゝある

一方に於て、斯る遊戯は亞米利加ではもう古いと

言はれてゐるからといふ理由で、折角今まで持つ

てゐた熱心さを投げ棄て、了ふ人があるやうに聞

き及びますがこれは誠に淺薄な考へ方であると思

ひます。成程土川先生の遊戯としても神様の造ら

れたものでない限り全然無缺のものでないことは

申すまでもないことであります。それで外國には

或はもう一段と進んだ遊戯法が流行してゐるかも

知れません。しかしこれは外國のことであり、既にと二とを練習し學び盡して、三まで進んで居るのであります。我々は未だ二の練習に取りかかつたに過ぎないのであります。それなのに『三をやつてゐる人が餘處よちにあるさうだから』といふ理由で二を飛び越して了つて三に行くのは些か亂暴な進み方でありまして、その結果たるや決して芳かんしくはないのであります。それ故我々は亞米利加でどんな新遊戯が流行しやうと暫時はそんなことに目を假さずに愈々熱心に律動的遊戯を研究しなくてはならないと思ひます。私はこの意味に於て律動的遊戯の價値を十分に認め、人様にもこれが研究を熱心にお勧めしてゐる次第であります。それからお話は違ひますが、私のところでは幼兒に繪を描かせますとき、なるべく大きな紙を當てがひ、それも光つたスベ〜した紙でなく、少しザラ〜する色のつき易い紙を用ゐます、鉛筆もあのさきの尖つたのを用ゐさせると幼兒がのび

のびと自由に描くことが出来ませんから、私が先達て亞米利加から買て來ましたクレイオンを用ゐさせて居ます。これで書きますと線も太く、實によく描けます。同じ幼兒にこの二つの違つた材料を以て繪を描かせてみますと材料の選擇が斯くまでに必要であるかといふことがハッキリと了解されます。尖つた鉛筆でスベ〜した十六切の畫用紙に描いたのは實に貧弱で子供らしいのび〜としたところが少しも現れずに、いぢけた繪が出来上ります。亞米利加のクレイオンは今東京でも神田の舊東明館の傍にある小さい洋品店で取次販賣をやつて居ります。今來てゐる品は非常に格安で一箱二十三錢位ですが、この品が切れるといくらか高くなるかも知れないとその店の人が言つて居りました。

玉繫ぎの遊び方

麴町幼稚園長 土 川 五 郎

一 玉繫ぎとは何か

玉繫ぎは申す迄もなく、形をフレーザーの恩物の第二即ち三體に取つて、各五分の直径を有しそれを六種に着色してある。球が六、立方體が六圓筒が六で、形は三つに分れ、之れが六色になつて十八種から成立つて居る。而して一方から他方に抜ける穴が一つあけてある。

之れを繫ぐために紐がある、靴の丸紐の一端の金を取りて結び目を作り、他方に其儘細く巻いた金屬が着いて、穴を通すに便利にしてある。

之れを使用するには、一人の幼児に對して玉の數を、凡そ二十四としてある。これは三と六との倍數であること、紐の長さ（幼児として使ふに都合よき長さ）との關係からである。而して紐は一

人に對し、初めは一本であるが、間もなく二本三本で繫がしめる。一般にはこの玉繫ぎで、幼児を遊ばせる場合には、一本の紐より出來得ない様に考へられて居る様であるが、二本以上になつてから初めて此遊びがその本質を發揮するのである。一本の紐でのみ遊ばしめるのは寶の山に入つて寶を取らぬのである。

二 第一の遊び方

初めは形も色も擇ばずに、十八種とも混じて、幾つかの籠に入れ、幼児は其圍りに一本の紐を持ちて取巻き、自由に繫がしめる。繫ぎ方は幼児一人々々が違つて居るが、幼児自身としては、自分で自ら繫ぎたるものを、或は手にさげて見たり、机の上に圓形に、楕圓形に、又は方形にして見た

りして、其出來ばへを喜び、之をぶらんこととして振り、頭にかけて坊さんとなり、一方の肩より他の腋下にかけて、軍人となり、部屋を出で、鐵砲を肩に兵隊遊びをする。

第二の遊ぶ方

二つの形、一つの色。二つの形、二つの色。一つの形、二つの色。一つの形、三つの色。三つの形、一つの色。三つの形、二つの色。三つの形、三つの色。かくの如く取り交せたるものを用ひて自由に繋がしめる。

以上の二つの遊び方に於て、最も注意すべきは、保母が少しも干渉せぬ事である。彼等は自由に繋ぐ間に、彼等の持てる潜在力は表はれる。色により、又は形によつて、リズム的に繋がれる。たとへ二三の誤られたる幼児があつても、數回の内には、正しき方に自然と導かるものである。此の繋ぐ彼等を注意して見る事が、保母の第一の要件である。何となれば此の注視して居る間に大なる一

つ、の、暗、示、を、保、母、が、受、け、る、の、で、あ、る、。

第三の遊び方

三體によりての位置、又は自分の身體局部の名、室の主要なる部分と位置等について遊ばしむ、これは其部分の名を云はしむることにより、言葉の練習をなし、其名稱及其位置を知らしめ、三體を以て、迅速に且つ正確なる習慣を付くる事の出來る極めて面白き遊びを爲さしめる。

第四の遊び方

位置と距離の關係配合等を知らしめる。

以上の第三、第四の遊び方は、立方體數個を與へて、手前に一つ、向ふに一つ、右に一つ、左に一つ、机の上に置かしめ、又は同じ距離を取らしめて、一列にならべ、又は二列にして、兵隊遊びをなさしめ、三體を混じて二つ置きに、間をあけてならべたり、又異なる色によりて、其間を、明らかに區別せしめなどして、遊ばしめる間に、其配合比較を知らしめる、又一つの立方を以て、

汝の手の上に、又は下に、汝の右の肩に、又は左の肩に等、自身の身體の一部に早く置かしむ、これ等は最も初めの指導である。

此の基礎を興へて、第一、第二の遊びに立戻るときは、又以前と趣きを異にせる結果を生じ、興味も一段と加はる。

第五の遊び方

これから二本の紐を使ふのである。先づ二本の紐を興へて自分の左右に置かしめる。次に立方體六個を興へて、縦に一行にして而して穴は左右に向く様に置く。右の紐を取り、左手にて一番先きにある立方體をおさへて、右より左へ通し、次に左の紐を以て、同じ穴を左より右に通す。次に第二番目の立方體の穴に、左右より前の如く通す。

これが出來得た後に、更に立方體十個を興へて、縦に二列にし、穴は左右に向けて、右の手に、右の紐を取り、左手にて一番先きの二個をおさへ、二個を同時に通し、更に左の手に左の紐を取り、

右手にておさへて前に通したる穴へ、左より右へ通す。かくして順次に通し終る。

以上の指導を終らば、更に遊び方第一第二に立戻りて、自由に繋がりしめる時は、幼兒の繋ぎ方は大なる變化を來し、種々なる創作的の遊び方が現出される。

次に又三個づつ縦に並べて、之れを通す時は、幼兒は四個五個を通すことを自ら爲すに至る。かくて、球と立方と圓筒とを組合せて、二つ一つ二つ一つと繋ぎ、一つ二つ三つ一つ二つ三つと繋ぎて、吾人の及ばざる感を惹起す程のものを繋ぐ。

幼兒は何故に玉繋ぎを喜ぶか

玉繋ぎは幼兒の最も喜ぶ遊びの一つで、これだ遊ぶ時は其室に保姆の必要を認めぬ程に没頭して遊ぶのである。

一 幼兒發達時期に適す

諸方から發掘さるゝ古代遺物のうちに、小さき

立方長方球等の玉の發見さるゝ事は、東西同じ事である。しかも其物には、小さき穴があけてあつて、古代の人が、之れに何かを通して、頸飾り、腕飾りに使つた事は明かである。幼兒時代は恰も此の時代に相應して居る所から見ると、此の玉繫ぎが其發達時期に適することが分る。

二 創作的要素が多く含まれて居る

自由であつて束縛のないこと、活動其ものゝ愉快なる満足とが遊びの大切な要件である。幼兒の考へが束縛される所があれば、幼兒は喜ばない、却て之れを避け様とする。此の玉繫ぎは、一本の紐を以て、變化させても四百種程ある、更に二本以上の紐を以てすれば、優に千以上の種類が出来る。幼兒は唯僅かに基本としての指導を受くれれば、其餘は、廣きく野原に放たれた様なもので、幼兒自身の工風創作の領域は實に廣く、自由の天地に活動する思ひをなし、己が思ふまゝに繋ぐ事が出来る。而して其繋ぐ間及び其繋ぎたる結果は愉

快なる満足を持ち得るのである。此の點から幼兒は玉繫ぎを喜ばざるを得ないのである。

玉繫ぎの教育上の價值

- (一) 幼兒が喜んで遊ぶことの第一の主要なる教育的價值が存する。
- (二) 三體は宇宙の凡てのものゝ形態を具有して居り、且つ點と線と面とを遊びの間に會得する事と比較鈎合配合等を知得する事により、工藝美術創見等の基礎となる。
- (三) 創作的要素が含まれて居り、幼兒が生れながら持つて居る創作的本能を誘發し、更に以上の工風創作し得る所に、最も主要なる價值を認む。
- (四) 玉繫ぎは、一つ二つ三つ二つ一つと繋ぐ事が、直ちにリズムであつて、これによりて、拍手も、足拍子も、歌も、動作も、生れて來る。此のリズムは、第二價值に於て述べた比較や鈎合配合と相まちて、藝術や裝飾や圖畫其他人生々活上

の實際に對し基礎を作るものである。

(五) 六色は幼兒の繋ぎたるものにより、室内を裝飾し、プリズムを以て光線を分解し、これと對照し、幼兒自ら其基礎を知り、原色と補色とを知り、自在に之れを配合して圖畫と云はず、自身の衣服其他の基礎となり、又自然を了解するを得る。

以上は極めて簡單に述べたるもの、而して遊び方の指導についても、之れを實際になす時は、極めて簡單のものであつて、實際に遊ぶ方が即自由生活の方が多いことを豫め考へてかゝらねばならぬ。唯之れが基礎となるべき指導をなす時は、摸倣でなく、命令と相談とによりて幼兒の考へを通じて爲さしむる即ち聽官により彼等の頭腦を通じて爲さしむる點に重きを置きたい。目から形を入れて、單に摸倣せしむる事は、幼兒を活かす方法でない。従つて此摸倣にのみ依らしめる時は、自由なる創作的の遊び方に至つて、大なる齟齬を來すものである事を忘れてはならぬ。

○ 會 告

會費御拂込みの節に一圓二圓といふやうに端數のない額で御拂込みになる向きが御座います。右は會計部の方で帳簿整理上少々都合がわるいさうで御座います。本誌の定價は表紙の三に明記して御座いますからあの規定の額に過不足なく御拂込みが願ひたいと存じます。例へば六冊前金九十錢に對して一圓御拂込みになると餘分の十錢を御返送するか前金切の場合にその次ぎの御拂込みに加へて計算するかしなければなりません。が孰れにしても少々手數で御座いますから、なるべく卷末の定價表通りの額を御拂込み下さるやうに願ひ致します。

轉地保育の實際

大寶幼稚園 尾崎トヨ

(左の一篇は去る十月發布せられたる「第一回大阪市立幼稚園共同研究會研究報告」より抜萃轉載せるものなり)

一 轉地保育の目的

本園は市の中央部にあつて設備極めて不完全、周圍頗る雜鬧、加之小學校に附設してあるから、遊園もなければ、砂場もない、學校の教授時間の隙を見て其運動場を借らなければ、遊戲も運動も出來ない有様である従つて自然の恩恵には全然遠ざかつて、青い物を見ず、日光にも觸れず薄闇い室の内に可憐な幼児が蠢動して居る、幼児の家庭生活も亦大都市中央部の居住として大差はない、幼兒は園に來ても家に歸つても、共に自然の恩澤に接する機會はない、従つて年を追うて身體虛弱に傾き疾病に對する抵抗力弱く、引いては感情鋭

敏、意志薄弱の弊に陥らんとして居る、本園の轉地保育は此缺陷を補ひ此病弊を救はん事を目的とする、されば此大目的を主眼として次に左の諸點には特に意を用ゐる目的の實現に努めたのである。

一、大自然に接觸せしめて幼児の心情の陶冶に資する事

二、自然物利用の作業的保育によりて、幼兒心身の開發に資する事

三、適宜なる遠足、運動によりて、體力の増進に資する事

四、保姆と起臥を共にして、家庭的温情により陥り易き學校式保育の缺陷を補ふに努める事

二、準備及計畫の概要

- 一、場所 京都府葛野郡嵯峨村嵯峨尋常高等小學校を中心としたる林間(宿舍は同校裁縫室、教室の一部及記念館)
- 二、期間 大正七年八月一日より同八日迄
- 三、經費 幼兒と附添人にて食費、寢具借賃、電車、汽車賃其他にて金八圓
- 四、附添人 幼兒には必ず十五歳以上の女子を附添はしむ
- 五、携帶品 着替寢衣各一枚、胸前掛一、猿股一縁廣麥藁帽子一、腹卷一、塵紙二折、手拭ハンカチーフ各一、麻裏一、足袋一、石鹼櫛(女兒)枕二、毛布一
- 六、日々行事 起床(午前六時頃)洗面 人員検査、深呼吸、朝禮、庭園散歩、朝食(午前七時)、臨地保育(同八時より十一時)、晝食(同十一時)、午睡(正午より二時間)、林間保育(午後三時迄)、問食(同三時)、入浴(同四時)夕食(同五時)、自由散歩(同七時迄)、就寢(同八時)
- 七、臨地保育の場所

月 日	行 事 (午前)	行 事 (午後)
八月一日	清涼寺	渡月橋
同 二日	小倉山、常寂光寺、龜山公園、嵐山	大堰川 京都見物
同 三日	大覺寺、大澤池、今林陵	加茂川納涼
同 四日	法輪寺、嵐山溫泉	
同 五日	小楠公首塚、厭離庵、二尊院	天龍寺
同 六日	野々宮、清涼寺	
同 七日	大堰川水邊、龜山公園	

- 八、幼兒數及附添人の種類
男 十一人 女 八人
母 三人 祖母 三人
姉 二人 下婢 六人
- 九、保育者、園長及保母、五名
- 十、保育用携帶品 畫洋紙百枚、半紙三折、臺紙百枚、色鉛筆百本、繪具及繪筆
鍍二十挺、色チヨーク、竹籤二把、糊粉、糊篋二十本、摺紙二百枚、切抜繪二十枚、針三十本
押ピン一箱、捕虫綱二十個、報笛五個、嗟島名

勝一冊、望遠鏡一個、衛生用具一式

一、宿舍の設備、宿舍は前記嵯峨小學校裁縦室（廿五坪押入二ヶ所本床付）を幼兒の控室兼寢室とし隣普通教室（廿坪）に疊を敷き、之を食堂湯呑場休憩室とし、御大典記念館（高節館）を應接室及朝禮の場所とした、何れも廣潤なるが上に、周圍の硝子窓を通して曠野又は森林を望み、採光通風共に良好に風景亦佳、晝間は蟬の聲絶えず、涼風常に訪れて夏日の苦熱を知らず。又雨中體操場の開放によりて、オルガンあり、運動遊戯具あり、千三百坪餘の屋外運動場には樹木あり、藤柵あり、鞦韆、之臺、肋木等運動遊戯に不自由なく、飲料水も亦清冽飲用に適し、凡て大都市幼兒の轉地保育の宿舍として間然する所が無かつた。加之此宿舍の所在が日臨地保育豫定地の殆ど中間に位して居た事は實施上頗る便利であつたのである。

二、保育者の特に留意せし要點

(イ)大自然に對しての幼兒の反應如何

幼兒の發問、感想、書き方等に現はるゝものによりて知る

(ロ)幼兒の觀察力如何

(ハ)幼兒の最も喜ぶ場所如何

(ニ)自然物に接觸して起る遊びの種類如何

摸倣か、創意か、平素の保育より現はれたるものか、環境より誘導せられたるものか等

(ホ)幼兒の機械的遊具に對する態度如何

平素都市の中央にありて機械的遊具のみによりて保育せられつゝある幼兒が田園の自然に接して後此等の機械的遊具に對し如何なる態度をとるかを仔細に觀察する事

(ヘ)幼兒の神佛に對する崇敬心如何

(ト)食慾の變化如何

(チ)食物に對する好惡如何

(リ)遠足による疲勞の程度如何

(ヌ)幼兒の活動量の測定

(ル) 幼兒個性の觀察

三、保育實施狀況

一、保育の場所 嵯峨村附近一帯の地は都市炎熱
雜鬧の域を離れ西に打つゞく愛宕山、小倉山、
嵐山等の峯高く、大堰川の流清きに加へて、神
社あり、古刹あり、數知れぬ名所、古跡各所に
散在し且到る處樹林竹藪あり、蟬鳴き、鳥遊び
蜻蛉飛ぶ、草花咲き亂れ、邑には蔬菜の種々豊
かな實を結んで居る、此自然界の無限の趣味は
事毎に幼兒の興味を引き、好奇心を惹起し、不
知不識の間に幼兒の睿知を啓發させ、爲めに幼
兒活動量平日に倍し、而も疲勞の様を見受けな
かつた。

二、臨地保育 毎日午前中幼兒を引率し、別表の
如く神社、佛閣、名所、舊跡を訪れて臨地保育
した、日々異りたる場所に赴く事は幼兒の最も
喜ぶ處であつた、且電車、自動車等の刺戟もな

く、靜かな野邊に草を摘み、花を採り、松毬を
拾ひ等して目的地に到り、幼兒の小さき腦裏に
て解し得る程度に簡なる説明を加へ、神佛に對
しては禮拜をさせた。尙風涼しき樹下、清淨な
る石階等彼等の意に任せて休憩し、談唱、描き
方、自然物を利用して種々の遊びを工夫し、或
は自由遊戯をなす等全く幼兒の意の嚮ふがまゝ
に遊ばせた。

三、室内保育 室内に在りては幼兒の欲するまゝ、
談話唱歌をさせ、摺紙切紙等の材料を與へ、家
族合せ、繪合、玉落し、糸掛等をさせた、就中
彼等の最も好む所は、自然物を材料として、玩
具を工夫製作し、又實生活の模倣をなす事であ
つた。

四、自由遊戯 午後附近の林間或は校庭に於て行
つた、全く何等の拘束を加へず、幼兒の爲すが
まゝに委せた、小川に水遊をなし、目高を追ひ、
樹間の蟬を取り、蜻蛉を追ひ、又は庭に出で、鞞

繩をなすもの、二臺を使用するもの、或は植込の木蔭に蔭蔭を敷きて談唱し、家庭遊をなす等凡て幼児の自發活動に任せた。

五、食事 附近の旅館より運ばせた、保母も幼児も付添ひも同時に食堂に會し一定の副食物に些の不平もなく談り笑ひ時には幼児が争つて保母の給仕をすることもあつた。多くは人手を借らず、自分の事は自分でさせ一同和氣藹々の裡に食堂を閉づるを常とした。又臨時保育中幼児が歸るを忘れ遊びに餘念なき時は便宜食物を附近の林間に運ばせ蟬の聲を聞き他の遊を見ながら晝食させることも度々であつた。

六、間食 様々の遊びに氣も心も奪はれた幼児も午後三時頃に與へる間食にはさすがに舌鼓を打つた。幼児の笑顔、喜悅の様今も尙忘れられぬ。間食はかくてこそ眞の意義があると思つた間食の品々はパン、キャラメル、カステラの類であつた。

七、午睡 晝食を終へて幼児は各自體の汗を拭ひ帶紐を寛にし腸卷をさせ風通しよき室に毛布を敷き腸部には小蒲團或は毛布の類を被ひ心地よき眠に入らしめた。

八、睡眠 睡眠は幼児に最も大切なる上に全く環境の異つた地に變化ある生活をなす事として其活動量も平日に比して遙かに増加した爲め疲労も之に伴うて甚しかるべきを想うて夜七時頃より就床の用意をなし一同集まりて在阪父母の健在を祈り相互に挨拶して就褥させ朝も自然に目覺むる迄放任して置いた。保母は各蚊帳の内に一人づつ附添ふ豫定であつたが都合上隣室に臥床することゝしたので幼児は四人づゝ交代に保母の所へ「お泊りに行く」と稱し大喜びで枕を携へ附添者を離れて保母と共に就寢した。

九、衛生狀況 衛生上の注意 飲料水は必ず一度煮沸したものをを用ゐ且其量に注意した。

運動戶外遊戯の後には必ず行水を爲さしめ汗疹の豫防をした。

食事の前には必ず手を洗ひ口を嗽がしめた。

食事の際咀嚼の程度に留意し早食ひ暴食を戒めた。

間食物の購入には特別の注意を拂つた。

日々の食事は必ず献立表を取り新鮮なる野菜を主とし嗜好と消化に適するものを選んだから漸次食欲増進し發病者一人もなかつた。

三、轉地保育の效果

一、知能に及ぼせる效果

(イ) 幼兒の觀察範圍 松、竹、梅、楓、櫻、杉、槇、柗、桐、檜、柳、桑、藤、茶、柿、南天、枇杷、夾竹桃、木槿、石榴、椿、要の木、百日紅、合歡木、栗、(以上樹木)

萩、薄、桔梗、野菊、紫露草、ハルシヤ菊、嫁菜菊、鶏頭、雁來紅、薔薇、磧撫子、岩躑躅、

鷹の瓜、蓮、百合、朝顔、白粉花、芳仙花、夏

水仙、著萩、灸花、溝蔘、紫陽花、せんぶり、

クローバー、矢萩草、車前草、蚊帳草、石鈎草

負ばれ草、續き草、日蔭蔓、ゑのころ草、酸漿

血止草、雀の稗、蚤の綴、八重葎、苺繫、雀の

豌豆、雀の鐵砲、都草、母子草、現證據、毒だ

め、蕨、羊齒、杉苔、錢苔、(以上草花類)

茄子、南瓜、胡瓜、水瓜、糸瓜、大角豆、隱元

豆、里芋、甘藷、馬鈴薯、葱、牛蒡、栗、黍、

玉蜀黍、稻、大豆、小豆、大根、生姜、胡麻、

人參、(以上穀菜類)

蟬、兜虫、機織蟲、蝨期、馬追、蟋蟀、螢、蟻

蜂、蚊、蟻子、蚯蚓、芋蟲、蝶、蜻蛉、蓑蟲、

(以上昆蟲類)

蛙、(以上水中動物)

鴉、鳶、雀、鳩、白鷗、鶺鴒、(以上鳥類)

(ロ)、觀察より生じたる幼兒の發問

山どうして出来ましたか。

山はなせ青く見えますか。

なせ嵐山と云ふ名がついたのですか。

支那で一番高い山は何と云ひますか。

米國で一番高い山は何と云ひますか。

愛宕山は日本で何番目の山ですか。

大堰川より大きな川がありますか。

大堰川の水は何處に行きますか。

日本で一番大きな川は何川ですか。

電車の走る時なせ青い火を出しますか。

電車が動くとなせ涼しいですか。

電車はなせ速い遅いが出來ますか。

星はなせ光りますか。

夏は暑くて冬はなせ寒いのですか。

夜と晝となせ出來ますか。

人間はなせ高い人と低い人と出來ますか。

夏と冬となせ花がちがひますか。

春の花と秋の花となせちがひますか。

獸の中で一番よいものは何ですか。

墓は人を埋める所ですか。

正行の首が埋てあるんですか(小楠公首塚にて)

鷹司さんの死骸がほんとにあの中に入れてありますか。(故鷹司公の墓にて)

私等の寫眞は外國まで行きますか。(外國婦人の撮影せし時)

あれは白水ですか。(岩に碎ける水を見て)

これは葱ですか。(水仙を見て)

空はなせ青いですか。

蟬はどこで啼きますか。(啼くしかけは何處かの意)

(ハ)、觀察より生じたる幼兒製作物

(一) 摺紙製作物 鶴、龜、蟬、蝶、バッタ

蜻蛉、舟、風車、額兜、三寶、ボート、千

石舟、狐の面、香箱、宮様、さつき、蓮の

花、菊の花、提灯。

(二) 自然物を利用したる貼付模様物。

(二) 自然物を利用したる貼付模様物。

(二) 自然物を利用したる貼付模様物。

蝶模様(萩の葉を千す) 三枚笹模様(笹葉にて)

中心模様(松葉楓の實日蔭蔓野菊ハルシヤ菊藤の葉荒地野菊毒だめ紅葉等にて)

七寶つなぎ(雨天の葉)

風景を現すもの、野邊の景色(稻葉及楓の實にて)

月にほとゝぎす(豆藤の葉にて)

月夜の漁船(笹葉にて) 菊花壇(野菊と蓬の葉)

野の景色(野菊にて菊畑を作り雨天の葉にて蝶を飛ばす)

紅葉の景色(紅葉豆藤等にて)

水邊の景色(萩の葉にてあやめの花を作り日蔭蔓にて藻を現はし羊齒にて蜻蛉を作る)

流れ紅葉(紅葉にて)

水邊の景色(垂藤雨天の葉にて)

三保の松原(小松にて) 家(羊齒にて)

海底(羊齒を藻とし木葉を以て魚を現はせり)

壓葉標本 十五種

(三) 描き方成績物

嵐峽寫生畫(三十二枚)

法輪寺より嵯峨一帶を見たる寫生畫(二十枚)

植物寫生畫(五枚) 想像畫(八枚)

(四) 切抜貼付製作物

姉と妹との園藝、水族館、前裁とお座敷、

田舎の景色、母と手紙を讀む兒、海水浴、

蝶娘、子供、お臺所、水邊の鶴等

(二)、自然物利用の遊び

(一) 室外の遊び 蟬捕、蜻蛉追、虫捕、螢

狩、目高すくひ、水遊び、花摘、江遊び、

石蹴

(二) 室内の遊び、松毬排べ、椿及檜の葉(草履を)

る 柊の葉(風車) 桑の葉(巾着)

石釣草(石を釣る) 蚊帳釣草(蚊帳)

續き(續き目を云ひ當てる) おばれ草(他人の背に負はす)

矢萩草(矢の形に切る) 合歡木(眠らす)

やいと草(花を手豆につけて灸の形とす)

車前草(穂二本を折りちがへて) 夏水仙(漏斗)

芋の葉(笠又は水玉遊び) 笹(笹船、笹巻)

笈(雨傘) 酸漿(人形) 木槿の花(染物)

鱒つなぎ(洋傘) 日蔭蔓(ボンネット)

松葉(鏡、鐵砲) 楓の實(蝶) 蜘蛛の巢(鏡網)

王蜀黍の皮(舟、女の髪) 胡瓜(舟、望遠鏡)

南瓜(提灯) 茄子(馬、牛、鹿、豚、鶏) 隠元豆(鶏)

其他種々の花又は葉を以て花束、花輪、胸飾、簪、ボンネット、花壇等を作りて遊ばせた。

二 感情生活に與へた效果

(イ) 自然に對する趣味を養ひ得たること。

(ロ) 幼兒と保育者と長く起臥を共にしたので相互間極めて密接に母子的情味が溢れ、皆安心して愉快なる日子を過したること。

(ハ) 苦樂伴へる環境内に共同生活を營みたることゝて、幼兒相互の友愛共同の情が、いぢらしきまでに發露したること。

(ニ) 花を見ては佛様に「お供へする」、蟬の死たるに葬禮をなし、墓を作り供花する等、やさしき宗教的感情の流露したること。

(ホ) 弟に與へるとして石を拾ひ、或は採集した

るものを歸阪の上父母の土産にせん等、家人に對する美はしき感情の露はれたること。

三 躰の上に及ぼせる效果

(イ) 主我の情強く我意を通するの躰に效果ありしこと。

(ロ) 放姿にして締りなき幼兒を規律ある生活の下に置きて矯正するに效果ありしこと。

(ハ) 常には母又は女中の手を借りて爲す事も人手を要せず進んでなし、自ら獨立自活の氣風を養ふに效果ありしこと。

(ニ) 朝寢の習慣を矯正せしこと。

(ホ) 無口、沈鬱、引込み勝ちの性質を活活ならしむるに效果ありしこと。

(ヘ) 其他幼兒に適したる日常禮儀の躰に頗る利益ありしこと。

四 身體的方面に及ぼせる效果

(イ) 幼兒活動量の測定

幼兒活動量を計數にて測定した。夏は比較的

活動の鈍きものであるが、今回の如く全く環境の異なる所にありては、意外に多量を示した。多きものは一時間五千二百を示し少きも千三百を數へた。平均一時間三千六百の活動量を示したことになる。今幼兒の歩幅を一尺と假定し一回の活動を一步として算すれば一時間に約十町を歩みたるものを見るこゝとが出来。従つて幼兒は一日約三里半の活動量を現はしたと云ふことが出来るのである。こは氣溫大阪に比して低く（別表参照）環境亦活動に適したからである。

氣溫比較表

月日	天候		嵯峨大坂		
	朝	日中	日	中	阪
八月一日	晴	九十三度四	九十七度七		
八月二日	晴	七十七度	九十五度三	九十八度六	
八月三日	晴	七十一度	九十五度	九十七度三	
八月四日	晴	七十七度	九十四度	九十六度	
八月五日	晴	七十八度	八十九度六	九十五度	

八月六日	晴	八十度	八十九度四	九十三度三
八月七日	曇后雨	八十三度	八十七度	九十度五

右の比較表から見れば嵯峨の日中も初め二日は相當に高温であつたけれども其他は餘り暑さを感じなかつた。元來此地では八十五度以上上ることは一日僅々三時間餘（午前十一時半より午後二時半）で他は大抵其以下である。加之周圍に山水森林が多いから溫度の割合に凌ぎ易いのである。

(ロ) 臨地保育の身體的效果

前記の通り毎日豫定を定めて名勝舊跡を訪ねて臨地保育を行うたことは、身體的活動に馴れさせた點に於て頗る效果があつた。食慾の増進は云ふまでもなく、皮膚赤褐色を呈し抵抗力を増し活動持續の力が著しく養へたやうに思ふ。

(ハ) 遊戯による效果

環境の全然異つたため兒童の遊びの方面も著

しく變つたことは前述の通りである。これが

智能開發の良手段となつたばかりでなく。身體的方面に及ぼした效果の偉大なるは言ふ迄もなからう。蟬捕、蜻蛉追ひ、虫捕、螢狩、目高掬ひ、水遊び、花摘など轉地保育でなければ到底味はれない遊びであると共に、運動として頗る意義あるものであると思ふ。況んや宿舍としてあてられた學校の運動具が一切開放使用に任せてあつて幼児は思ひ／＼に之を以て遊んだのであるから、本園の如き設備不完全の處に育つた幼児としては、身體的に無上の幸福を與へられた譯である。

五 保育者の得たる利益

これは殊更に轉地保育の效果として擧ぐべきものではないけれども今回の轉地保育によりて幼児の個性觀察上保育者の得た利益尠少ではなかつた本園では今回の轉地保育中特にまとめて個性觀察表を作つたが之は發表すべき性質のもの

でないから茲には省く。

五、結 論

以上杜撰ながら大體本園最初の試みたる第一回轉地保育の概略を記述した、固より唯一回の實施で彼是言ふは早計に過ぎるの嫌はあるけれども、大都市の幼児生活の上に幾分の教育的影響を與へて、而も其影響が可成善且大であつたことを確信するのである、就中身體上に及ぼせる效果智能啓發上注意力養成自然物利用の工夫創作の力の涵養感想生活の醇化等に與へたる效果は至大であつたと思ふ。一週間の間一人の病人も出さず四歳未満の幼児すら一度も母を呼び家を戀しがつたものなく極めて愉快に日を送り附添人亦よく保育者を授けて公德を重んじ公平を主とし最も衛生に注意し互に相助けて萬事に遺憾なからしめたことは特筆に値すると思ふ。

雜 錄

○日本幼稚園協會臨時總會

本會は十二月十四日(第二土曜日)午後一時半より東京女子高等師範學校講堂に於て臨時總會を開催いたします。當日は本會即ち日本幼稚園協會の成立の披露があり、兼ねて東京、大阪、京都、神戸の各保育會が步調を揃へて當局に向つて建議すべき緊急事項の協議が御座います、又齋藤教授の有益有趣なる「大戰の開始經過、終局」といふ講演も御座いますので會員諸氏の成るべく多數に御出席になることを希望いたします。

○本誌の改題

本誌は明春を期し、即ち大正八年一月發行の號より題名「婦人と子ども」を廢し「幼兒教育」と

改稱いたします。編輯の組織を更新して内容の改善を圖り、幼兒教育に對する研究をいよく廣くいよく深くして行きたいと存じます。

○玉成保姆養成所生徒募集

本年第二回の卒業生を社會に送り出した玉成保姆養成所では既に明春の新學期入學者の願書を受理して居ります。新學期は四月十日から始まります。授業は毎日午後二時から五時までです。同養成所の規則等に就て詳しくお知りになりたい方は同養成所々長たるソフヤ・アラベラ・アルウ・ン嬢宛(東京市麴町區上二番町三六)に照合なされたらよろしいと存じます。

諸國お伽話

(左の諸篇は Eleanor L. Skinner And M. Skinner 兩氏編 "Nursery Tales From Many Lands." に於る)

日本幼稚園協會研究部

○赤ちやん羊

或る處に、小さなく赤ちやん羊が居ました。

いつもくうれしさうに、可愛い、あんだよ、あつちこつち飛びまはつて居りました。或る日赤ちやん羊は、お祖母さんのお家へ行きました、途々、今日はお祖母さんが、また、いつものやうに、おいしい物を下さるに違ひない、何だらう、お菓子かしら、お甘藷かしら、と思ふと嬉しくてたまらず、ビョン／＼飛んで歩いて行きました。しばらく行くと豺に逢ひました。豺は、

「おい／＼、赤ちやん羊、いゝ處へ來たね、さあ、お前を食べてしまふ」と云ひました。赤ちやん

羊はビョン／＼はねながら、

「豺のおぢさん、僕は今お祖母さん處へ行くので、そして、たと御馳走をもらふんだから、歸り道に、僕が肥つた處をたべたら良いでせう」と云ひました。

「む、そりや肥つてからの方が旨からう、歸りまで待つてゝやる」

と豺が云つたので、赤ちやん羊はトットと歩いて行きました。暫くすると虎に逢ひました。

「おい／＼、赤ちやん羊、丁度良い處へ來たね。さあ、お前を食べてしまふ」と虎が云ひました。赤ちやん羊はビョン／＼はねまはりながら、「虎のおぢさん、僕は今お祖母さん處に行くので

す、そして、たんと御馳走をもらふんだから、

歸り道に、僕が肥つた處をたべたら良いでせう」

と云ひした。虎は「む、そりや肥つてからの

方が旨からう、歸りまで待つて居てやる」

と云ひました。それから暫く行くと、今度は狼に

逢ひました。その次ぎには犬に、その次ぎには鷲

に逢ひました。どれも、どれも

「おい、赤ちやん羊、丁度い、處へ來たね。

さあ、お前を食べてしまはふ」

と云ひました。赤ちやん羊は、そのたんびに、

「僕は今お祖母さん處へ行くのです。そしてたん

と御馳走をもらふんだから、歸り道に、僕が肥

つた處をたべたらいいでせう」

と云ひました。それから赤ちやん羊はせつせと歩

いてやつとお祖母様のお家に行きました。そして、

「お祖母さん、僕はね、皆に肥つて大きくな

るお約束をしたのだから、あの野菜庫へすぐ入

れて頂戴な」

と云ひました。お祖母さんは

「あ、よし、坊やはい、子だから、すぐ野菜

庫へはひつてもいいよ」

と、云ひました。赤ちやん羊は、七日も野菜庫へ

はいつて毎日々々食べつづけたので、肥つて、

お腹がふくれて歩けないほどになりました。お祖

母さんはそれを見つけて

「まあ、坊やはずるぶんよく肥つたね。さあもう

お家へ歸る方がいいよ」

と云ひました。すると赤ちやん羊は

「お祖母さん、それはだめよ。なせつて、僕はこ

んなに肥つておいしさうになつたから、外の獸

がたべに來るかもしれないね、さうでせう。だ

からね、お祖母さん、かうすればいいのよ。あ

の古い革で、玩具の太鼓をこしらへて頂戴、さ

うすると、僕がその中には入つて、うまく太鼓

をたいて行くの」

と云ひました。お祖母さんは、赤ちやん羊が云つ

たやうに、古い革で、中側には赤ちやん羊がはひつて暖かいやうに、むくく毛のついた太鼓をこしらへて下さいました。赤ちやん羊は大よろこびで、其の中へはひつて、ドンくたきながら轉ころげて行きました。暫くすると、鷺に逢ひました。

鷺は

「もしく、太鼓さんく、あなたは赤ちやん羊に逢ひませんでしたか」

とききました。すると、赤ちやん羊は、太鼓の中で小さくなりながら、

「火の中へ落ちてしまつた、

お前も今に落ちますよ、

そーら、なれ なれ 小さい太鼓

タムバー タムトー」

といになりました。鷺は、

「おやまあ、折角のいゝ物をなくしてしまつた。」と云ひました。赤ちやん羊はおもしろくて、玩具太鼓の中で、笑たり、うたつたりして、どんく

轉がつて行きました。玩具太鼓は、

「タムバー タムトー タムバータムトー」

となつて行きました。逢ふ獸もく、

「もしく、太鼓さんく、あなたは赤ちやん羊に逢ひませんでしたか」

とききました。そして其のたんびに赤ちやん羊は玩具太鼓オチヤの中で、小さくなりながら

「火の中へ落ちてしまつた、

お前も今に落ちますよ、

そーら、なれ なれ 小さい太鼓

タムバ タムトー タムバ タムトー」

といになりました。すると、の獸もく、

「おやまあ、折角のあんないゝものをなくしてしまつた」

と云ひました。赤ちやん羊は面白くてたまらず、笑つたり、うたつたりして、どんく行きました。そして一番おしまひに、豺にあひました。豺は、びつこをひきく、弱つたやうな顔をして、歩いて

ゐましたが、小さな玩具太鼓がどん／＼轉げて來るのを見ると、

「太鼓さん／＼、あなたは赤ちやん羊に逢ひませんでしたか」

とききました。赤ちやん羊はまた太鼓の中に小さくなつて

「火の中へ落ちてしまつた

お前も今に落ちますよ

そーら 鳴れ 鳴れ 小さい太鼓

タムバ タムトー タバム タムトー」

といりました。けれど豺は赤ちやん羊の聲をよく覚えてゐましたから

「お、赤ちやん羊、お前は太鼓の中にはひつて

ゐるね、さうだらう」

と云ひながら、小さい玩具太鼓を破つて、一呑みに肥つた赤ちやん羊をたべてしまひました。(西印

度加噺)

○正直お爺さん

或る處に、大そう貧乏なお爺さんがあつた。このお爺さんはまた大層正直スナホな善い人だつた。それで近所の人達はお爺さんのことを「正直爺さん正直爺さん」と云て居た。

正直爺さんは、いつも、お椀を持つて居た。

そのお椀はた／＼と太鼓のやうになつた。正直お爺さんは大層貧乏だつたから、毎日彼處アツチ此處ココナと乞食をして歩いた。或日、他處ヨソの家へ行つて、何か食べる物を下さいと云ふと、其處の家の者は、

「あつちへお出、あつちへお出、正直お爺さん、

お前になんかやるものは、いつまでたつてもないよ」

と云つた。又次の家へ行つて何か食べる物を下さいと云ふと、其の家の人も、

「あつちへお出、あつちへお出、正直お爺さん、

お前になんかやる物は、いつまでたつてもない

よ」

と云つた。三番目の家へ行つて何か食べる物を下さいと頼んだが、其處の人も、

「あつちへお出、あつちへお出、正直爺さん、お前になんかやる物は、いつまでたつてもないよ」

と云つた。いちばんおしまひに、村はづれの小さい家へ行つて、何か食べる物を下さいと云つた。

すると、小さい男の兒が戸口の處へ出て来て、

「おはひり、おはひり、さあ、おはひり、正直お爺さん、食べる物なんか、家になかつたら、ど

こからでもさがして来てあげるよ」

と云つた。正直お爺さんは、早速例のお椀を出した。そしてお米を入れてもらつたが、入れて見ると、半分程しかなかつた。それからもつと持つて来て入れたが、まだ一ぱいにならない、またあとからたしたが、まだ一ぱいにならない。もつとたして、もつとたして、遂々二斗入のお米の袋が、空になつてしまふまで、正直お爺さんにやつ

た。するとお爺さんが云ふには

「爺坊ちやん、あなたは大層親切な善い子だ、それぢあ、今にどんな事が起るか教へてあげよう、

あの、お寺の入口の石の獅子を知てるだろう」

子供「え、あのお寺の入口の獅子僕よく知つてま

すよ」

爺「さう、私の云ふ事をよくお聞きなさい。あの獅子の目が赤くなつたら、それは大水のある報シラ知なのですよ」

と、云ひながら、お爺さんは懐から小さい紙の舟を出して、

爺「もし、大水が來たら、坊ちやん、あなたは御自分の持て居るものを、皆この舟に乗せてたすけるんですよ、どんな獣でもたすけて下さいと云つたら、助けておやりなさい。どんな蟲でも助けて下さいと云つたら、助けておやりなさい。けれども、人が援けて下さいと云つたら、どんな人でも、たすけてはいけません」

と云つた。次の朝、この子は學校へ行きがけに、石の獅子の目を見たが、何ともなつてゐなかつた。その次ぎの朝も、學校の行きがけに、獅子を見たが、如何もなつて居なかつた。毎朝々々、氣をつけて見たが、何ともなつて居なかつた。或日、友達が此の子に尋ねた。

友「君は、なせ石の獅子の目ばかり氣にして見るの」

子供「でも、もし石の獅子の目が赤くなつて居ると、

それは大水があるといふしるしなのだから」

友達はこの子の答をきいて、そんな事があるものかと笑つて居た。そして其の日、學校のかへりに、友達は石の獅子の目を赤くぬつた。

次の朝、いつもの様に、小さい男の子は、石の獅子の目を見た。そしてちつと見てゐたが、どう見ても、獅子の目が赤くなつてゐるので、大急ぎで家へ歸つて、早速お母様に話した。

子供「お母様、石の獅子の目が赤くなつたから、今

に大水が來ますよ」

それからいつか、正直お爺さんから、もらつた小さい紙の舟を出して、地面に置くと、見てゐる中に、大きなく木の船になつた。そして子供やお母さんやお父様が家の物を皆船につんでしまふと大水が出た。小さな蟻が穴から這ひ出して來たのんだ。

蟻「どうぞ、其のお船にのせて援けて下さいまし」

それから蟻を皆船にあげて援けてやつた。すると、今度は小さい廿日鼠が、たくさんボシヤ／＼泳ぎながら、出て來てたのんだ。

鼠「小さい坊ちゃん、どうぞ、私達をお船に乗せて援けて下さいまし」

それから、たくさんの小さい廿日鼠を皆船にあげて援けてやつた。其の次には、大きな強さうな虎が森の方から急いで走つて來てたのんだ。

虎「小さい坊ちゃん、どうぞそのお船にのせて援けて下さい」

それから怖ろしいやうな、大きな虎を、船にあげて援けてやつた。今度は獅子の目を赤くぬつた友達が出来たのんだ。

友「どうぞ小さい坊ちゃん、僕を船にのせて援けて下さい」

子供「いえ、それはいけません、正直爺さんが、このお船には他所ヨソの人を、一人も乗せてはいけないと云ひました。」

友「でも、どうぞ、後生だから、どうぞ援けて下さい」

とあんまり、たのむので、小さい坊ちゃんも、お母さんも可哀想になつて船にあげて援けてやつた。大水がすんでからも、このお友達は小さい坊ちゃんの家の一所に住んで居た。そして時々悪い、たづらをした。或る時、此のいたづらつ子が大層悪い、たづらをしたので、小さい坊ちゃんの家の人々は皆罰に牢屋の中へしばられてしまつた。すると、そこへ小さい廿日鼠がいくつも出て来て

鼠「まあ、よい子の小さい坊ちゃん、いつか私を援けて下さつたお禮に、この繩をかみ切つて、あなたをお援けいたませう」

と云ひながら、ぐる／＼しばつてあつた繩を、こまかくかみ切つて、めちやく／＼にしてしまつた。すると又小さな蟻が、後から／＼いくつも出て来て

蟻「まあ、よい子の坊ちゃん、いつか、私を援けて下さつたお禮に、地面を柔かに掘つてあなたをお援けいたませう」

と云ひながら牢屋の壁の下に蟻の巢を澤山こしらへた。すると強さうな大きい虎が出て来て

虎「まあ、よい子の小さい坊ちゃん、いつか私を援けて下さつたお禮に、大きな穴をほつてあなたをお援けいたませう」

と云ひながら、蟻が柔かにして置いた地面を掘つて、大きな穴をこしらへた。その爲めに、牢屋の壁は落ちて壊れてしまつた。小さい坊ちゃんとそ

の家の人達は皆牢屋から出て、家に歸る事が出来た。それから後は何も起らず、皆面白く暮した。

(支那お伽噺)

○モナチアとマナチア

昔、或る處に、モナチアとマナチアいふ二人の子供がありました。或日二人で大きな籠を持つて葡萄をつみに行きました。けれどモナチアがせつせと摘むとマナチアはそばから、それを食べてしまひました。

モナチア「私は葦を見つけ来て、マナチアの手を結へてしまふ。さうしないとみんな、マナチアが食べてしまふから」

かう云つて、モナチアは小川の岸に生えて居る葦の處へ行きました。

葦「何かいゝ話があるかね」とモナチアに聞きま
した。

モナチア「何もいゝ話はない。が、私の摘む葡萄を皆マ

ナチアが食べてしまふから、手を結へてしまはふと思つて、葦を一本もらひに來たのよ」と、
聞くよ

葦「いゝえ、それはいけない、私の葦を切る斧を持つて來なければ、持つて來たらあげよう」

かう云はれて、モナチアは材木の積みかさなつた、そばにある斧の處へ行きました。

葦「何かいゝ話があるのかね」

モナチア「何もいゝ話はない。が、私は斧が欲しい。其の斧で葦を切つて、其の葦でマナチアの手を結く。マナチアは私の摘む葡萄をみんな食べてしまふから。」

葦「いゝえ、それはいけない。刃をとぐために私に石を持つて來なければ、持つて來たらあげやう」

それからモナチアは壁のそばにある石の處へ行きました。

石「何かいゝ話があるかね」

モナ「何もいゝ話はないが、私は石が欲しいんだ。
チヤ」

石で斧を研いで、斧で葦を切つて、葦でマナチ
アの手を結くの、マナチアが私の摘む葡萄をみん
なそばから食べてしまふから。」

石「いゝえ、それはいけない、私をぬらす水を汲
んで来なけりや、汲んで来たらあげるよ」

モナチアは牧場の中の泉水のそこへ行きました。

泉水「何かいゝ話があるかね。」

モナ「何もいゝ話はない。が、私は水が欲しいんだ。
チヤ」

水で石をぬらして、石で斧を研いで、斧で葦を
切つて、葦でマナチアの手を結かなければ、私
の摘む葡萄をそばからマナチアが食べてしまふ
から。」

泉水「いゝえ、それはいけない。牛をつれて来て水
を飲ませてからでなけりや、それが出来たらあ
げるよ」

モナチアは野菜庫のそばに居る牛の處へ行きま
した。

牛「何かいゝ話があるかね」

モナ「何もいゝ話はない。が、私は牛が欲しいんだ。
チヤ」

牛に泉水をのませて、泉水で石をぬらして、石
で斧を研いで、斧で葦を切つて、葦でマナチア
の手を結くの、マナチアは私の摘む葡萄を皆そ
ばから食べてしまふから」

牛「いゝえ、それはいけない、百性から、藁を一
たば貰つて来なけりや、もらつて来たらあげよ
う」

それからモナチアは小屋のそばに居る百性の處
へ行きました。

百性「何かいゝ話があるかね」

モナ「何もいゝ話はない。が、私は藁一つかみ欲し
いの、藁を牛にやつて、牛に泉水を飲ませて、
泉水で石を濡らして、石で斧をといで、斧で葦
を切つて、葦でマナチアの手を結くの、マナチ
アは私の摘む葡萄を皆そばから食べてしまふか
ら。」

百姓「いゝえ、それはいけない、小川へ行つて笹の中の水を一杯持つて来なければ、持つて来たらげよう」

それからモナチアは笹を持つて、牧場の小川へかけて行きました。そして笹の中へ一つばい水を入れました、けれど上へ持ち上げる、水は目からもつて笹は空っぽになつてしまひました。幾度しても幾度しても、水はちつとも汲めないで、笹は空っぽで持ち上がるばかりでした。

モナチア「あゝあ、どうしたらいいんだらう、水はちつとも笹の中に残りやしない、ね、どうしたらいいの」と、聞くと小川の上をとんで居た鳥が、鳥「おぬり、おぬり、泥でおぬり」

モナチア「あ、さうだ、それは氣がつかかなかつた。」
早速泥を一つかみとつて笹の目をすつかり塗りました、そして水を一ぱい汲んで百姓の處へ持つて行きました。

百姓は藁を一つかみ呉れました。

牛は藁を食べました。そして泉水を飲みました。泉水は石をぬらしました。

石は斧をとぎました。

斧は葦を切りました。

モナチアは葦を持つて大急ぎでかけて歸つて来ました、早くマナチアの手を結かうと思つて。

けれど、食ひしんぼうの、マナチアはもう皆葡萄を食べてしまひました。そしてお腹がはちきれしてしまひました。(ケルトお伽噺)

○小さい黒蟻

或る處に小さい黒蟻が居ました。或朝、眞黒なお顔をよく洗つて、澤々したきれいな黒い着物をきて、氣持よくきれいに掃除をした家の窓のそばに坐つて居りました。

やがて窓のそばを大きな牡牛が通りました。そして、

「おはやう、きれいな黒蟻さん、あなた僕の嫁さ

んになつて下さいませんか」と云ひました。すると蟻は

「さあまづ第一番に私の氣に入らなければだめですよ」と云ひました。牡牛が大きな聲でモウとなきましたら、小さい黒蟻は両手で耳を仰へて、

「大きな牡牛さん、あなたは御自分の道をさつさとあつちへいらつしやい」と云ひました。やがて犬がまた窓のそばを通りました、そして、

「おはやう、きれいな黒蟻さん、あなた僕のお嫁さんになつて下さいませんか」と、云ひました。すると蟻は

「さあまづ第一番に私の氣に入らなければだめですよ」と云ひました。犬は力のある強い聲でワンと吠えました。小さい黒蟻はあわて、両手で耳を抑へた、

「まあ、亂暴^{ガガ}な犬さん、あなたは御自分の道をさつさとあつちへいらつしやい」と云ひました。その次には猫が通りました。そして、

「おはやう、きれいな黒蟻さん、あなた僕のお嫁さんになつて下さいませんか」と云ひました。小さい黒蟻は

「さあまづ第一番に私の氣に入らなければだめですよ」と云ひました、ニヤアと猫は大そう長くなきました、小さい黒蟻は両手で耳を抑へて、

「まあ、いやなお猫さん、あなたは御自分の道をさつさとあつちへいらつしやい」と云ひました。それから又窓のそばを豚が通りました。そして、

「おはやう、きれいな黒蟻さん、あなた私の嫁さんになつて下さいませんか」ときゝました。

「さあ、まづ第一番に私の氣に入らなければだめですよ」と蟻が云ひました。豚は口の中で早口につぶやきました。それをきいて黒蟻はまた両手で耳をふさぎながら、

「太ちよのお豚さん、あなたは御自分の道をさつさとあつちへいらつしやい」と、云ひました。

其の次には鼠が窓のそばを通りました。そして、

「おはやう、きれいな黒蟻さん、あなた僕のお嫁さんになつて下さいませんか」と云ひました。

「さあ、まづ第一番に私の氣に入らなければだめですよ」と云ひました。鼠はやさしくチウ〜と云ひました。小さい黒蟻はにこ〜して、

「鼠さん、私はあなたのお嫁さんになりませう」

と、云ひました。翌日立派な御婚禮があつて、皆が、「おめでたうございます、おめでたうございます」と云ひました。それから後、或日のこと、奥様の黒蟻が、

「鼠さん〜、私は一寸お寺参りに行つて來ますが、留守の間スープをかきまはして居て下さい。

それからきつと柄の長いさじでかきまはすことを忘れないやうに。」と云つて出かけました。鼠さんは小さい黒蟻の奥様が云た事をよく覚えて居ませんでした。そして短かい柄のさじでかきまはしましたから、すぐに、ポチャツと、鼠さんはスープ鍋の中に落ちて沈んでしまひました。奥様の黒蟻

は夕方歸つて臺所へ行つて見ると、この始末。まあ、どうしたらいいんでせう、小さい奥様の黒蟻は戸口の處に坐つて泣き出しました。そして御飯もたべず、いつまでも〜泣いて居ます。そこへ

「小さい〜黒蟻さん、

何がそんなに悲しいの、

話してごらん黒ありさん。」と。

「可哀さうな家の鼠さんがスープの中へ沈んでしまつたのです」と、小さい黒蟻が云ひました。

「ぢや私は嘴を切つてしまはふ」と小鳥が云ひました。

「小鳥さん〜どうしてあなたは嘴を切つてしまつたの、わけを話して下さいな」と、班の鳩が云ひました。

「可哀さうな鼠さんはスープ鍋の中に沈んでしまつて、小さい奥さんの黒蟻は何もせず泣いてばかり居るのですもの」と小鳥が云ふと、

「それなら私は尾をめちや／＼にしてしまふ」と班の鳩が云ひました。そして小屋に飛んで歸つた時、鳩小屋が

「まあ鳥の中で一番きれいな鳩さん、どうしてあなたは立派な尾をそんなにめちや／＼にしたのです」と聞きました。

「可哀さうな鼠さんがスーブ鍋の中に沈んでしまつて、小さい奥さんの黒蟻は何もせずに泣いてばかり居るのですもの、そして歌の上手な小鳥は嘴を切つてしまつたのです、だから私は尾をこんなにしたのです」と聞いて、鳩小屋が

「ぢや、私はひつくりかへりませう」と云ひました。

きれいな噴水の水が鳩小屋のひつくりかへつたのを見て

「鳩小屋さん、どうしてあなたはひつくりかへつたのですか理^かをきかせて下さいな」と云ひました。

「可哀さうな鼠さんがスーブ鍋の中に沈んでしま

つて、小さい奥さんの黒蟻は何もせずに泣いてばかり居るのですもの、歌の上手な小鳥は嘴を切つてしまふし、尾のきれいな班鳩は大事な尾をめちや／＼にしてしまつたし、だから私はかうしたんです」と聞いて、きれいな噴水は

「ぢや、私はどん／＼あふれて流れて海の方まで、遠い海の方まで行きませう」と、云ひました。そこへ王様の姫様がいらつしつて、きれいな噴水に、「なせお前はそんなにどん／＼あふれるのか」とお聞きになりました。

「可哀さうな鼠さんがスーブ鍋の中にしづんでしまつて、小さい奥さんの黒蟻は何もせずに泣いてばかり居るんですもの、そして歌の上手な小鳥は嘴を切つてしまふし、尾のきれいな班鳩は大事な尾をめちや／＼にしてしまひました、それで私はかうしてどん／＼あふれてあの深い青い海へ流れて行くのです」と、噴水が云ひますと。

「ぢや、私は水さしを壊さう」とお姫様はおつし

やいました。かうして、

お姫様は大事のくの水さしを壊しておしまひになり、

きれいな噴水は青い海の方へどんくあふれ出し、

鳩小屋は道ばたにひつくりかへり、

班の鳩は立派な尾をめちやくにし、

歌の上手な小鳥は嘴を切てしまひました。

それは皆、可哀さうな鼠がスーブ鍋の中に沈んだから。そして小さい奥さん黒蟻が何もせず泣いてばかり居たからです。(イスパニアお伽噺)

の一本日 年幼本日

本誌は、三歳から拾歳までの子供の爲め美しい繪と、面白い噺とを、教育的に組み合せた他に比類なき繪雜誌です。殊に毎號教育的な手技附録を添へます。

本誌は、玩具とお噺しとの興味及び教育的價値を兼ねあはせたるもの、子供には何よりも喜ばれ、何よりもよき友達となる。

定價

壹册拾二錢 □半年 郵税共七拾五錢
 郵税壹錢 □壹年 同壹圓四拾四錢

御大典記念畫報 婦人畫報
 皇族畫報 少女畫報
 日本幼年

發行所

東京橋鍛冶橋外
 振替東京四九〇〇

東京社

運動のシズン

文部省夏季講習會ニ於テ是非ナル御好評ヲ得

朝香宮家御買上

1 新案遊動木

十人乗 金參拾五圓
八人乗 金參拾貳圓

長サ二間ノ棒二十人乗鐵製ノ手摺ヲ付シ反臺二個ノ間ニ乗セ幼兒ハ其手摺ト手摺ノ間ヘ馬乘リニナルノデス而シテ遊動圓木ノ様ニ振レルバ丁度馬ニ乗タ様ナ姿勢デ愉快ニ遊ブコトガ出來腹筋運動ニ最モ適シマス

2 シーソー木馬

二人乗 金九圓五拾錢

室ノ内外ニ移動スルコトガ自由デアリマシテ馬ノ耳ヲ持チ上リ下リスル様ニナツテ居マス幼兒ノ身心ヲ鍛練スル上ニ於テ最モ有益デアリマス

3 輕便滑臺

定價 金拾五圓

高サ三尺滑走板六尺デ極々輕便ニ出來テ居マス全部蝶番デ組ミ立テ廊下デモ保育室デモ容易ニ持チ運ブコトガ出來マス、二、三臺モオ備ヘニナツテ各組ニ分レテ御使用ニナル等モ至極面白イデセウ

43 ペルガン

壹個 金參圓八拾錢

南洋ノベルガン鳥ノ形ヲ真似タノデス形面白ク乗テ安全デ而モ丈夫デス

45 飛輪

徑一尺 金貳拾八錢

藤製ノ輪デアリマス女子高等師範附屬幼稚園ヲ最初ニ目下各御園ニ用ヒラレテキマス跳躍運動ノ際御使用ニナルト至極具合ガヨロシウ御座イマス

會告

○會費御拂ひ込みの節は名前は初め御入會の時の御名前へと御同一になし下され度く、假令ば初め幼稚園名にて御入會、後個人の御名前へにて會費御拂込み等のことなき様必ず願上候。整理上甚だ煩雜致し候につき右特に御注意願候

○會費未納は會計整理上甚だ困難致候に付確實に御納付下され度向後萬一御不納久しきに亘り候場合は乍遺憾難誌發送を停止可致候間左様御含み置願候

○會員諸君にて御轉居等の節は至急御一報願上候

○萬一本誌不著等のこと有之候折は直に御一報煩し度候

本誌定價

一冊 郵稅共金拾六錢 六冊前金郵稅共九拾錢
拾二冊同金壹圓八拾錢 郵券代用 一割増

購讀申込

本誌購讀御希望の方は右定價表により振替貯金にて御拂ひ込み下さい。直に送本致します。(振替口座東京一七二六六番)

大正七年十二月一日印刷納本
大正七年十二月五日發行

東京府豐多摩郡代々幡村大字代々木山谷一二四
編輯兼發行者 倉橋惣三

印刷者 東京市本所區番場町四番地 功
守岡

印刷所 東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 東京女子高等師範學校附屬幼稚園內
日本幼稚園協會

本誌は最も平易な、最も教育的な子供繪雜誌たるべく苦心して居ります

コドモ

編輯顧問 高嶋平三郎先生

幼垂 雜誌 良友

本誌はコドモの兄様姉様に當り、小學生の讀物として最も適當な雜誌です

明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)

近來子供雜誌や繪本類が非常に多くなつて、既に二三十種に達してゐる。世の父兄諸氏は、この多くの同種中、はたして何れを子弟の爲に選べるゝであらうか。單に玩具と見做して、その選擇を慢然兒童の取捨に一任して置いてよいであらうか

東京市小石川區 東林町十五番七地 發行所 電話 二一九二 六一八